

打出小槌町一番地

城山三郎



新潮文庫

うちでのこづちちよういちばんち
打出小槌町一番地

新潮文庫

し - 7 - 12



昭和五十六年十一月二十五日 発行
昭和六十三年五月三十日 十三刷

著 者 城 山 三 郎
しろ やま さぶ ろう

発行者 佐 藤 亮 一
さとう りょういち

発行所 株式会社 新 潮 社
しんそうしゃ

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六—五一—
編集部(〇三)二六六—五四四〇

振替 東京四—八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛て送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

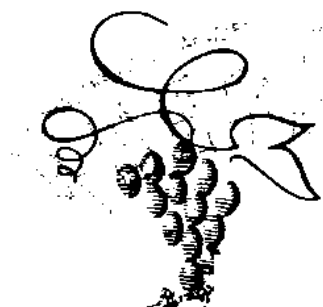
© Saburō Shiroyama 1977 Printed in Japan

ISBN4-10-113312-3 C0193

新 潮 文 庫

打出小槌町一番地

城 山 三 郎 著



新 潮 社 版

2782

目次

はじめに	七
第一章 御曹子	一〇
第二章 前途洋々	一九
第三章 老女颯爽	二三
第四章 商法四八九条違反	二八
あとがき	三九

解説 常盤新平

打出小槌町一番地

はじめに

そこは、東京から私鉄で一時間、松林に囲まれた海浜の土地であった。

空気は澄み、気候もよい。冬は東京より二、三度暖かく、それでいて、夏は三十度を越すことが、ほとんどない。それに、歴史の古いゆるやかな沖積地なので、崖^{がけ}くずれや水害など、天災地変の全くない土地柄でもあった。

はじめに

東京への電車は頻繁^{ひんぱん}に出ており、一番地かいわいだと、その駅からゆっくり歩いて五分というわけで、交通の便も上々といえた。

つまり、最高の邸宅地となる地理的条件が、早くから自然に備わっていたのだが、人工の手が、さらにその条件にみがきをかけた。

昭和のはじめ、ここを邸宅地として開発したのは、電鉄会社のオーナーである財閥当主であった。若いころから、外国生活になじんでいたその当主は、欧米の高級邸宅地の日本版をそこに作る夢を持った。

惜し気もなく金をかけ、当時としては大がかりな土木工事が行われた。土地は平らにされ、がつしりした低い石垣を持つ広大な分譲地がつくられた。松並木を残し、やさしいカーブを伴った

道路が、歩道つきでその中を縫った。最後に、田園都市風のその新しい町に、打出小槌町うちでのこうちようという縁起のいい名が、つけられた。

財閥の当主がつくった町、そして、富豪たちの住むにふさわしい町、というわけだが、由来らしいものがないでもなかった。

ひとつは、以前、その土地が、海の中へちようど打出小槌を突き出した形に出ていたという説。さらには、その昔、打出小槌がその浜へ流れついたのだという説。だが、実際のところ、その土地の旧名は、内海小路うちみこうじであった。湾の中へ下りる小さな道が通っていた土地ということだが、電鉄会社に知恵者が居たのであろう、「内海小路」と似た音の「打出小槌」にいかえてしまったのである。

その電鉄会社は、戦後も大型分譲地を売り出すとき、同じようなすりかえを行なった実績がある。古戦場に近く、大量の戦死者の首を埋めたので「千人塚」と呼ばれていた土地を、音だけは同じだが、「仙人塚」といい変えてしまった。不吉さや悲惨さは、これですっかり消えてしまった。

いずれにせよ、打出小槌町は、その名にふさわしい生い立ちを持った。

当初は、住宅用というより、別荘地として売り出されたのだが、財閥当主にあやかろうとするかのように、資産家や高級官僚などが、続々と土地を買った。百五十坪から二百坪という区画を、二つ三つとまとめて買う例も珍しくなかった。

田園都市、公園都市をということ、居住者遵守条項というとりきめがつくられた。

一、生垣は別として、塀^{へい}などはつくらない。

一、純粹に居住用の住宅、別荘以外のものはつくらない。

一、建造物は、できるだけ周囲の環境に合ったものにする。

などといったもので、売り手が買い手に注文をつける形だが、そうしたことも、金持たちの氣持をくすぐったようで、かえって評判を呼んだ。

このため、当時の総理大臣のひとり、引退後、そこへ居を構えるころには、一番地の十区画はもちろん、合計三十番地、二百五十区画に及ぶ土地が、ほとんど売り切れてしまっていた。

「打出小槌町」は、最高の邸宅地を表わす名として定着した。そして、それから半世紀近い歳月が流れた……。

第一章 御曹子おんぞうし

最近、ある新聞記者が、打出小槌町を「正妻の町」と呼んだ。からかいというか、悪意のあるネイミングである。

そこに住むのは、十分、二号や三号の持てる男たちである。新聞記者たちに、艶聞やスキャンダルをにぎられている主ぬしも、少くない。

しかし、その町まで来てみると、夫に愛人のあることなど知るや知らずや、本妻たちが天下国家をとったような悠然とした顔をしている、世の中のすべてが彼女たちの前にひれ伏したように感じている町だ、という意味である。

打出小槌町はまた、「ベントツの町」ともいわれる。

この場合のベントツとは、「舶来の高級自家用車」といった普通名詞的な意味だが、現実には、ベントツそのものが、よく目につく町である。朝の出勤時間など、ベントツの野外展示会でもはじまつたかと思わせるひとときがある。

女中を従えた老夫人が、その夫をのせた黒光りするベントツに向かい、わざとらしく深々とおじぎして送り出す光景など見ると、「正妻とベントツの町よ」と、叫びたくなるほどである。

いまでも毎朝その光景を演じている女、半世紀前、はじめてベントツを持ち込み、また最初に住みついた正妻が、山科綾子である。綾子の夫淳之助は、全国銀行の預金残では、十五位前後を往来しているQ銀行の頭取である。

一番地で二区画を占める山科家の玄関先には、二台收容の車庫、さらに二台は駐車できる広い車寄せのスペースがある。毎朝、近くの行員住宅から運転手がやってきて、淳之助のため、黒のベントツ四五〇を仕立てる。夫人用は、象牙色ぞうげのベントツ二三〇。こちらには、雑用兼務の住みこみの運転手がいる。曾我といい、もう六十近い年輩で、やや猫背の男である。

遠目には白く見えるベントツが、打出小槌町地内のゆるやかなカーブを走り出すと、山科綾子は、きまつてつぶやく。

「また車が放ほうつてあるわ。どうして車庫をこさえないのかしらねえ」

毎度のことなので、曾我は小さくうなづくだけで、黙って車を走らせて行く。

綾子が、また高い声を上げる。

「あら、いやだ。ここでも、塀をつくっているわ」

遵守事項を破って、戦後は、塀をつくる邸がふえた。はじめは、それでも竹を編んだり、地味な板塀だったりしたものが、このごろでは、コンクリートやブロックむき出しの無風流な塀が多い。芝生や植えこみが、道路から見えるままになっているのは、山科邸などむしろ少数である。

無言のままの曾我の背に、綾子がたまりかねたように、

「ねえ、曾我くん、変に思わないの」

綾子より少し年下で、若いころから邸に出入りしていた曾我は、いまだに「くん」づけで呼ばれている。

「たしかに、よくありませんね、奥さま」曾我は、口重く答えてから、一息おいて続ける。「でも、世の中が変わりましたからね」

「どう変わったというの」

（しまった、また、いつものやりとりか）と、曾我は苦笑をかみ殺しながら、

「……つまり、せちがらくなって」

「でも、約束は約束でしょ。ここへ住むとき、塀はつくらぬというとりきめを、承知してきたはずよ」

いくつになっても、綾子は子供のようにむきになり、また、子供のようにくどいところがある。そこが、彼女の長所であり、欠点でもあるのだが。

曾我は、心得ながらも、じゃれるように、

「しかし、最近は、泥棒も多くなりましたからねえ」

「あら、そんなこと関係ないわ。約束は約束よ」

「……………」

「それに、泥棒は見透かしのきく家には入らないというわよ。警察の専門家が、そういつてるわ。現に、家^{うち}だって……」

「一度、入りかけましたがね」

「でも、入らなかったでしょ」

「たしかに」

山科家の古い浴室には、外から出入りできる焚き口用の小さな戸がついていた。その戸をこじあけようと、鍵を半分こわし、結局、あきらめたらしい形跡を、冬の朝、当時、中学生だった綾子の息子の継彦が見つけたことがある。

曾我は、思い出しながら、つぶやいた。

「しかし、あのときは、のんきなおまわりさんでしたね」

「ほんとにねえ」

綾子も、うなづく。

連絡すると、駅前の駐在所から、中年の巡査がやってきた。のってきた自転車がかわいそうなほど、肥った巡査であった。その巡査は、現場を検証したあと、地面を指して、仔細らしくいった。

「砂をきれいにならしておいてもらうと、足あとが残るんだがねえ」

まじめな顔つきで、ごくまじめな意見。その場では、綾子をはじめみな、うなずいたのだが、あとから考えてみると、おかしい。泥棒のために、毎晩、わざわざ砂をならしておく家もあるまい。

「事件などなかったから、あれでもよかったけど」綾子は、そういったあと、重ねて、「ほんと

うに、事件のないところだったわねえ」

白いベンツは、打出小槌町の地内をはずれ、海岸道路へ滑り出た。

「最初ここへ来たときは、まわりは松があるだけで、ほとんど家がなかったわ。その上、塀を建てちゃいけないというんでしょ。不安で不安で、お父さまにたのんで、警察へ請願巡査を置いてもらうように、おねがいはしたの。そうしたら、『そういうところへ、泥棒は行きません』と、笑われてね。見晴しのよいところに、ぽつん、ぽつんと、家があるようだ、寄りつきにくいんですって。一軒だめなら、その隣りという具合にも行かないから、泥棒としては、割りが合わないらしいのね」

曾我は、合点を打ちながら、静かにアクセルをふみこんで行く。ベンツは、ジェット・エンジンに似た低いうなりを立て、速度を上げた。

「警察がいつてたとおりであったわ。十年あまりというもの、空巢ひとつなかったものね。おかしくなったのは、戦争になって、疎開を兼ねて、どっと、ひとが住みついてからよ。そこで、駅前交番もできたのね」

綾子は、海を見ながら、つぶやいていたが、その目をルーム・ミラーに戻し、

「でも、あのとき、継彦がよく気がついてくれたわ。昔から、ほんとに気のつく子だったわね」

「はい、そうでした」

「だから、継彦が、早くうちの銀行へ移れば、主人も楽なのに。銀行にだって、変なコソ泥のよ

うなものが、入りかけないとも限らないものね」

「……………」

「継彦も、もう四十歳よ。主人がうちの銀行に入ったのと、同じ歳になったわ。今年は、何とかして、銀行へ戻ってもらわなくっちゃね」

曾我は、無言でうなづく。ただ聞き役に回っていればいい話である。

「四十といえば、そろそろ体の無理もきかなくなる歳よ。いえ、もう無理させては、いけないわ。商社は、ひどい働かせ方をしてるものね。嫁にきけば、家で夕食をとるのは、相変らず、月に一度か二度しかないというの。あれじゃ、体をこわしてしまふ。早く、うちの銀行へ入れなくっちゃ。うちなら、時間は何とでもなるわ。それに、空気だっていいんだから、こちらへ住まわせて、通わせるように……」

綾子の声は消えた。

曾我が、ルーム・ミラーでちらつと見ると、綾子は目をふたたび海に向けてはいるが、見てはいない。息子をQ銀行へ呼び戻し、さらに、打出小槌町へ迎え入れてからのことを、あれこれ想像しはじめている様子であった。それは、いまの綾子の唯一の執念、最大の希望であり、懸念でもあった。子供のようにむきになって、そのことを思い、子供のようにくどく、淳之助にも継彦にも迫っている。

逆に、曾我などから見れば、綾子は、その思い以外には、他に何ひとつ屈託ほかのない結構な身分であった。不公平なほど、満ち足りている女である。